

印度山日本寺で成道会法要 しょうどうえ

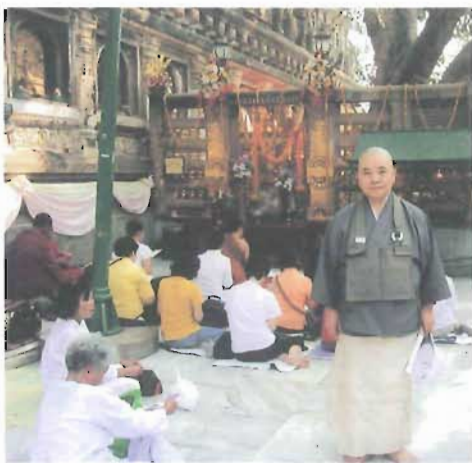
平成二十三年十二月八日、印度山日本寺において成道会法要が厳修されることになり、今般国際佛教興隆協会と会長である奈良・薬師寺管長安田映胤師の代理で法要導師をつとめることになり、まず大梵

鐘を打って本堂に向った。

本堂ではまずチベット僧による読経、次に上座部佛教国の比丘によるパリ語の読経、在インドの日本山妙法寺の読経、最後に日本式・曹洞宗式に成道会法要を興龍寺方丈と二人の息子、そして私の四人で声高らかに唱和して、法要後に参集者一同に対して、法話と日本寺の経過を話してから一同で記念写真を取った。



故 松下幸之助氏寄贈の大梵鐘を打って法要開始の合図とする。



この場所は釈迦が菩提樹下石上に坐して大悟、成道した場所にして、釈迦が坐していたと言う金剛寶座なる坐石があったが、数十年前、日本から来た浅腹少光なる御仁が「我釈迦の再来」とか叫んで、寶座に昇り坐したのを現地の人々が引きずりおろし、其後金剛寶座なる坐所の保全を考慮して、新しい囲いが作られたものである。(24頁参照)



この大太鼓は昭和48年、全日本佛教会会長大本山永平寺貫首、佐藤泰舜禪師が日本寺慶讃法要に曹洞宗と全日仏合同の大団体で法要を厳修し、寄進したもので太鼓の皮が一部穴があいているが、立派な重々しい音が出る。下は本尊様左側に坐す上座部比丘衆と洞派師。



日本寺の大本堂で興龍寺方丈、副住職にして日本寺駐在僧、さらに次男坊の御三方、信隆・正信・純光の三師に両脇を守られて導師役をつとめるのはまことに有難いことであり、感謝感激の思いで参集者に思いを語ることが出来た。

龍雲山僧 少學隆元 合掌九拜



左は成道会法要後の記念写真
 百人余のアジア佛教諸国をはじめ世界各地からの参集者と共にこのような写真におさまることは名誉なことと思う。不肖私の左右は興龍寺の父子三師であり、この写真中、日本人は私達四人と日本山妙法寺の方々で全部でも六〜七人かと思われます。

